

# 実況中継「土曜講座」

第 1 号 2024年6月1日発行

## 市川学園5月11日の土曜講座 於 多目的ホール

納富 信留先生

### プラトンはソクラテス裁判をどう受け止めたか

—『ソクラテスの弁明』を読む—  
東京大学文学部学部長



#### 納富先生のご紹介

1987年 東京大学文学部哲学科卒業  
1990年 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了  
1995年 ケンブリッジ大学大学院古典学部でマイルズ・バーニエ  
トの指導のもとPh. D. 取得  
2007年～2010年 国際プラトン学会会長  
2016年 東京大学大学院人文社会系研究科教授  
2023年 東京大学大学院人文社会系研究科長、文学部長

#### 主な講義内容の紹介

今回の講座は土曜講座史上初の「対話型」土曜講座でした。事前に『ソクラテスの弁明』を読み、高校生の「市川アカデミア」経験者をリーダーにしてグループ分けを行い、当日は与えられたテーマに沿って中1から高3までが対話を行うという流れの本講座は、非常に熱気に満ちた講座となりました。今回与えられた対話のテーマは「皆さんが裁判員なら有罪と無罪どちらに投票するか」「有罪だった場合、死刑と罰金刑どちらの刑罰を科すか」の2つでした。参加者達は『ソクラテスの弁明』を片手に握りしめながら、学年の壁を越えて活発な対話を行っていました。相手の意見に頷きながら、そして自分の意見は根拠を示しながら一生懸命語り合う姿が見受けられました。10分間の対話が行われたあと、各グループのリーダーが対話の結果を発表し、その後納富先生がグループの発表についてのコメントをしてくださいました。グループ毎に意見が分かれたことについて、注意しなければならないものの方見方にも言及していただき、参加者達は大きく頷きながらお話を聞いていました。最後に、「ソクラテスは、哲学をしているが故に人に嫌われ、共同体から排除されてしまった。哲学は、日常に対する人間の感覚的な違和感について考える学問であるため、人々の反感を買ったり、社会にマイナスな影響を与えたりしてしまうかもしれない。しかし異論を唱える者の排除は本当に共同体にとってよいのかどうか。我々は考えていかなければならない。人間は哲学をするから人間なのだ」というお話をしてくださいました。「哲学」というものについての見方がぐっと深まる貴重な講座となりました。

#### 受講レポートから



・今回の講座を通して『ソクラテスの弁明』をただ読んだときと、講座を受けた後で哲学に対する知識が変わった気がします。ソクラテスは裁判中でさえも対話の姿勢を貫きながら神に代わって哲学の姿勢を貫いたのだと思います。哲学の本質は対話と神にあると考えられるようになったと感じました。ソクラテスとメレトスの議論が初めはよく分からなかったけれど、哲学を考えることにおいてとても興味深いと思いました。  
(中3男子)

・とても難しかった。グループの話し合いでは高校生の先輩の主張がしっかりとしていてリードも上手くやってくださりすごいと思った。自分の班では全員無罪だったけど有罪になった班の理由を聞くと自分達の考えは本当に正しいのかと思ったし、よりたくさん考えたからおもしろかった。哲学を知っているのと知らないのではどっちが幸せなのか考えたい。  
(中3女子)

・今までは「よく分からない、答えのない問いについて他人と意見を交換しつつ要素を増やしていく」という哲学のとなえ方をしていたのですが、哲学の起源にせまる今回のご講義をふまえて、「人生の歩み方の土台・根本をたたき直す」という、少し個人的には怖い解釈が増えました。また、本中の裁判については、冷静に裁判をすれば無罪ではないかとモヤモヤしていましたが、なぜ有罪になったのかを先生のお話をもとに考えると、そこに哲学の本質があり、なぜプラトンがこの本を書き、哲学の古典として読まれているのかがよく分かりました。ありがとうございました。  
(高1男子)

・とても印象に残る講座でした。最初は、そもそもソクラテスがどんなことを言っているのか全く分からず、ほとんど理解できなかったです。何とか意見を絞り出して、この講座に臨みました。同じグループで全員同じ無罪を選んだのに、理由が全然違うのが興味深いと思いました。ソクラテスは哲学をしているがゆえに人々に嫌われ、死刑になったという先生の結論はとても納得しました。  
(高1男子)



・最初にこの文章を読んだときはメレトスがソクラテスの弁明に対して全く反論できていないような印象を受けたので、なぜソクラテスが有罪になってしまい、さらには死刑になってしまったのか強い疑問として残った。無罪を選んだ人の中にメレトスが反論できていないことを理由に挙げた人も多かったのですが、この部分は他の生徒もひっかかる部分だったのかもしれないと感じた。ただ、有罪にした人の中には共同体の中の一人としてソクラテスを見ていたり、ソクラテスの話し方を疑ったりする人もいたので、もっと多角的な視点を持って文章が読めるようになりたいと感じた。  
(高2男子)

・哲学というものが共同体にとって善なのか悪なのかということを知り、おどろいた。サンデルの「Justice」という講座でサンデルが「哲学はあなたをよりよい市民にするかもしれないが、同時により悪い市民にするかもしれない」と警告していたことを思い出して、哲学が社会をよりよくするかもしれないのに社会から拒絶されるかもしれないというところに矛盾めいたものを感じた。  
(高2男子)

・まずソクラテスの弁明という作品を読むこと自体が難しく、そこからソクラテスが有罪・無罪の量刑を決めることが本当に難しかった。私は問われている罪状について、ソクラテスが一つずつ論理的に答え、メレトスの告発を論破して、罪状が違うなら、何のために裁判をしているのか、何でソクラテスは罪に問われているのか分からないので無罪だと判断した。二千年以上前の本当にあった裁判で法律にのっとった裁判とされているが、弁論によって五百人の傍聴人、つまり裁判員の人々が感情によって投票するので、その当時には正当な裁判だったにしろ、今を生きている私からしたら奇妙な裁判だと思った。  
(高2女子)



(文責：野地 亜由美 先生)